

Title	中世日本語における主格助詞表出と漢語動詞
Author(s)	小林, 茂之
Citation	聖学院大学論叢,17(3) : 49-57
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=121
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

中世日本語における主格助詞表出と漢語動詞

小林 茂之

The Occurrence of Nominative Particles in
Relation to Sino-Japanese Verbs in Middle Japanese

Shigeyuki KOBAYASHI

In this paper, I examine the change in the usage of nominative particles at an early stage in Middle Japanese. It is shown that nominative particles were first used in conjunction with Sino-Japanese verbs, especially those consisting of one Chinese character. This difference between Sino-Japanese verbs and other verbs is not seen in *Heike Monogatari* but is clearly seen in Japanese commentaries (*Shōmono*) on Chinese classics. The discrepancy between the two types of writing can be accounted for as a result of the fact that Sino-Japanese verbs were more indigenized in the latter type of writing.

1 はじめに

古代語から近代語にかけての日本語の変化の中で、格助詞に関する変化は大きなものの一つである。つまり、「が」「を」「に」などは、現在の日本語では名詞に付くのが当然のこのようであるが、古代語では文中の名詞は必ずしも常に格助詞を伴っていたのではなかった。

では、なぜ日本語では、文中の名詞が必ず格助詞を伴うようになったのだろうか。一つの仮説として、漢文訓読の影響があると言われている。ご存知のように、中国語は日本語と語順が異なっていて、目的語は動詞の後にくる。したがって、漢文を日本語で読む、つまり訓読しようとするとき、目的語を動詞より先に読まなければならない。そこで、返読が行われるようになったのだが、その場合、語順を変えるだけでなく、名詞のあとに格助詞「を」などが必ず読み添えられるようになったのである。

「を」については以上のような仮説が成立するが、主格助詞は返読の必要はないので、訓読法に帰することは難しい。しかし、主格助詞の場合も漢文訓読とは無関係ではないと考えられる。つまり、漢文訓読を通じて取り入れられた漢語が文法の変化の原因となったと考えることは可能である。

Key words; nominative particle, Sino-Japanese verb, Middle Japanese, *Heike Monogatari*, *Shōmono*

なぜなら、漢語は、本来外国語であって、文法面で生粋の和語と同じであるかどうか自明ではないからである。

本稿では、漢語動詞が中世日本語の文法の変化に与えた影響を主格助詞についてとりあげる。特に、初期抄物において、一字漢語サ変動詞において主格助詞の表出が先行したことを明らかにするとともに、その原因を分析する。

2 中世における主格助詞の表出

主格助詞は、中世において現在のように原則的には表出されるようになった⁽¹⁾。小林(2000)では、鎌倉期の『平家物語』と室町期の『天草版平家物語』とを比較することで、この変化について論じた⁽²⁾。上述した変化を以下の表1に図示しておく。

この変化の結果は、表1のようになる。しかし、資料間の時代の隔たりが大きいため、この変化の過程の詳細が明らかになったわけではない。そこで、室町初期の抄物⁽³⁾を資料として、以下で変化の初期の過程を検討しようと思う。

表1：『平家物語』・『天草本平家物語』間の「が」表出の変化

述語	原平家物語	天草版平家
非対格動詞	∅	ガ
非能格動詞	ガ	ガ
他動詞	ガ	ガ

2.1 『平家物語』における主格助詞

鎌倉期の代表的な文献として、『覚一本平家物語』(1371年の奥書、『平家』と略記する。)の巻1～2の主語名詞句における助詞の表出と述語の種類の関係を見ておくことにする。

表2では、和語動詞と一字漢語サ変動詞の間で、主格助詞「が」・「の」、主題助詞「は」の表出

表2：『平家物語』における主語名詞句の助詞表出と述語の語種

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の/S%	は/S%
和語	600	73	136	70	879	16.3	15.5
漢語一字サ	12	2	2	0	16	12.5	12.5
漢語二字サ	51	3	5	1	60	6.7	8.3
形容詞	43	1	9	12	65	20.0	13.9
形容動詞	14	0	4	1	19	5.3	21.1
名詞	43	1	75	0	119	0.8	63.0
あり	115	2	7	5	129	5.4	5.4
なし	42	0	7	0	49	0.0	14.3
その他	25	2	12	5	44	15.9	27.3
合計	945	84	257	94	1380	12.9	18.6

率に大きな違いはなく、二字漢語サ変動詞で表出率が低い。(1)は、無助詞の用例である。なお、例文の後の()内の番号は、日本古典文学大系『平家物語上』のページおよび行番号である。

(1) a . 南都の大衆 \emptyset 、とやせまし、かうやせましと**叡議する**所に、(112-11)

b . 同廿九日の午剋斗、山門の大衆 \emptyset 飫う**下洛す**ときこえしかば、(113-05)

(2)は、主格助詞「が」の用例である。

(2) a . 十四五六の童部を三百人揃て、髪を禿にきりまはし、あかき直垂をきせて、めしつかはれけるが、京中にみちみちて**往反し**けり。(91-09)

b . あはれ、是はいふかひなき我等が、**念仏して**居たるを妨んとて、まゑんの來たるにてぞあるらむ。(104-09)

このように、『平家』では、和語動詞と比較して、二字漢語サ変動詞は主格助詞や主題助詞の表出率が高くはない。

つまり、『平家』の文体は、和漢混交文と呼ばれ、平安和文とは区別されるけれども、助詞の表出の観点からは和文寄りの文体であるとみられる。語彙的には、漢語が多く使用されているが、主格助詞の表出の変化は『平家物語』の上には現れていない。

2.2 『応永本論語抄』における主格助詞

中世は学術活動が盛んな時代であった。その産物として、抄物と呼ばれる文献がある。これは、一般に漢文に対する口語性の高い言葉で書かれた注釈書である。『応永二十七年本論語抄』はその最初期の文献である(1420年書写。以下、『応永』と略記。)

その巻一～四⁽⁴⁾における主語名詞句に関して、無助詞 \emptyset ⁽⁵⁾、主格助詞「が」「の」⁽⁶⁾、主題助詞「は」の表出率を述語の語種別に整理すると表3のようになる。なお、「あり・ある」「なし・ない」は用例数が多いので、独立した項目として立てた。

表3では、漢語一字によるサ変複合動詞と漢語二字によるサ変複合動詞をそれぞれ漢語一字サと漢語二字サで示した。和語と比べ、特に漢語一字のサ変複合動詞では主格助詞表出率(が+/S)

表3：『応永本論語抄』における主語名詞句の助詞表出と述語の語種

述語	\emptyset	が	は	の	合計(S)	が+/S%	は/S%
和語	150	118	181	82	531	37.7	34.1
一字漢語サ	15	20	12	16	63	57.1	19.1
二字漢語サ	11	10	13	6	40	40.0	32.5
形容詞	38	10	13	10	71	28.2	18.3
形容動詞	19	7	23	10	59	28.8	39.0
名詞	44	8	294	4	350	3.4	84.0
あり・ある	158	5	6	15	184	10.9	3.3
なし・ない	89	0	10	6	105	5.7	9.5
その他	26	5	78	3	112	7.1	69.7
合計	550	183	630	152	1515	22.1	41.6

57.1%は和語や平均値よりもかなり高いことが明かである⁽⁷⁾。

中世における主格助詞の表出への変化が、漢語一字によるサ変複合動詞で起きているということは、従来の和語動詞とは異なる新しい文法的性質を獲得したからだと考えられる。Kroch (2001) は、統語的变化の初期においては周辺の領域で起こると論じている。

これとは逆に「あり・ある」は、主格助詞表出率が10.9%で相当低い。中世において、動詞の終止・連体の合流という大きな変化が起きたが⁽⁸⁾、「あり」は古い終止形「あり」を長く保った。文法的性質においても「あり」は保守的であったということであろう。このことは、新しく生まれた動詞が新しい文法的性質を獲得したという見方を支持する現象であろう。

なお、漢語一字のサ変複合動詞で主題表出率(は/S)が低いことも、その文法的性質として主語名詞句の後で主題助詞「は」よりも主格助詞が表出されやすかったためと考えられる。

表2.1のように前代においては、漢語動詞の主格助詞表出率は、和語動詞と比べて高くはない。これは、『平家』のような和漢混淆文が、和文の伝統の上に成立したためであろう。それに対して、抄物は、和文の伝統に影響されずに、講義録として教養層の口頭語を基に成立した口語体の文章であるからであろう。

3 『平家物語』と『応永本論語抄』における漢語動詞

ここでは、『平家物語』(巻1～2)と『応永本論語抄』(巻1～4)でそれぞれ使われている漢語動詞をあげて、特徴を検討する。なお、両者のデータ量は、『平家』が1380例、『応永』が1515例で、ほぼ同じ規模である。

3.1 『平家物語』(巻1～2)

『覚一本平家物語』の巻1～2の二字漢語サ変動詞は、以下の(3)の通りである。なお、語幹のみをあげる。以下も同様である。

- (3) 下洛：3，念仏：3，崩御：3，僉議：3，還御：2，奏聞：2，繁昌：2，安置：1，往反：1，下知：1，会合：1，感応：1，祈誓：1，祈念：1，儀刑：1，逆鱗：1，供奉：1，教訓：1，警固：1，御出：1，御即位：1，御遊：1，御覧：1，行啓：1，行幸：1，最愛：1，殺害：1，参洛：1，呪咀：1，重疊：1，昇殿：1，照覽：1，相伝：1，存知：1，知見：1，着座：1，寵居：1，停廢：1，登山：1，入道：1，念珠：1，富貴：1，扶持：1，蜂起：1，与力：1，幼主：1，乱入：1，祇候：1，踐祚：1，(合計) 60

『平家』は、歴史的事件の叙述であるので、リスト(3)は具体的な事件に関わる語彙が用いられていると解釈できる。以下の(4)は、一字漢語サ変動詞のリストである。

- (4) 参：3，同：3，辞：2，亡：2，案：1，感：1，擬：1，具：1，奏：1，損：1，転：1，拝：1，

(合計) 18

一字漢語サ変動詞についてもリスト, (3)の二字漢語サ変動詞と同じ傾向が指摘できる。つまり, リスト(4)においても, 具体的な事件に関わる語彙が用いられていると解釈できる。したがって, 『平家』における漢語動詞は口語として日常的に使われていたとは言えないものである。

3.2 『応永本論語抄』

『応永本論語抄』の巻1～4の二字漢語サ変動詞は, 以下の(5)の通りである。

(5) 樹屏: 3, 出仕: 3, 相生: 3, 会合: 2, 具足: 2, 成就: 2, 相伝: 2, 他行: 2, 苦勞: 1, 御出: 1, 辞退: 1, 執心: 1, 出入: 1, 崇敬: 1, 生長: 1, 早出: 1, 相違: 1, 相続: 1, 退治: 1, 談合: 1, 知音: 1, 堂上: 1, 評論: 1, 変動: 1, 遍歴: 1, 奔走: 1, 揖讓: 1, 領解: 1, 勞役: 1, (合計) 40

『論語』は孔子の言行録であり, 論語抄はその注釈書なので, (5)の二字漢語サ変動詞については『平家』と同じ傾向が指摘できる。

他方, 以下の(6)は, 一字漢語サ変動詞のリストである。

(6) 注: 17, 敬: 4, 死: 4, 生: 4, 変: 3, 撒: 2, 評: 2, 封: 2, 復: 2, 没: 2, 安: 1, 応: 1, 会: 1, 感: 1, 共: 1, 絶: 1, 撰: 1, 対: 1, 啄: 1, 通: 1, 転: 1, 反: 1, 報: 1, 崩: 1, 忘: 1, 滅: 1, 欲: 1, 利: 1, 論: 1, 哺: 1, 葬: 1, (合計) 63

(6)では, 「注す(る)」が63例中, 17例を占めている。次の(7)に例をあげる。なお, 例文の後の()内の番号は, 中田(1976)のページおよび行番号である。

(7) a. 鄭玄八仲弓 子夏ガ注ストシタリ。(005-03)

b. 兩人ノ弟子ガ注シタルト云儀也。(006-02)

次の(8)に, 続いて例数が多い「敬す(る)」, 「死す(る)」, 「生ず(る)」の例をあげる。

(8) a. 民ガ上ヲ敬シ(111-07)

b. 然ルニ曾子ガ死スル時ノ末期(005-07)

c. 変スル者ハ必ズ次ノ勢イガ生ズル也。(122-02)

『応永』の一字漢語サ変動詞には, (7), (8)のように, 頻度が高い動詞がある。これは, 『論語』の内容や『応永本論語抄』がその注釈書であることが反映していると考えられることができる。

4 抄物における漢語動詞の日本語化

漢文の注釈活動が盛んになり, 口頭で講義が行われ, 口語体で注釈書が著されるようになると, 漢語の日常語化が教養層において進んでいったことは想像に難くない。

漢語が日本語に取り入れられる場合, 名詞は語彙を豊かにするけれども, 文法的变化の直接的原

因にならないと考えられるのに対して、動詞は文の中心的な地位を持っているので、漢語動詞が口語に盛んに使われるようになったことは主格助詞の表出という文法の体系的変化を先導したと考えられる。以下では、限られた例ではあるが、漢語動詞が教養層の口頭語として日本語化していった過程と、漢語動詞が訓を通して和語動詞に及ぼした影響をみることにしたい。

4.1 漢語の口語化

『応永』の一字漢語サ変動詞で最も度数が多い語は(6)にあげたように、「注す(る)」である。例をあげる。

(9) 凡此書ヲ撰スル事八誰カ注シタリソト云ニ、(中田(1976), p.5)

注釈が問題にされる以上、「注す(る)」が多用されたのは当然であろう。つまり、この語は資料の特性が反映された語彙である⁽⁹⁾。

次に、「相生す(る)」という現在では聞き慣れない二字漢語サ変動詞を取り上げたい。例えば、同書には、以下のような箇所がある。

(10) 代々ノ帝王モ五行カ相生スル也。(中田上掲書, p.125)

(10)の「相生」について、「相」の部分「あひ(い)」と読み、全体で「あいしやうず(る)」であるとも考えられる。

しかし、『角川大宇源』を調べると、「相生」は熟語として立項されており、音は「そうせい」で、その意味は、

(11) 互いに生み出す、相手を生み出す意で、五行説では、木が火を、火が土を、土が金を、金が水を、水が木を生み出して循環する。

である。

抄物が講義録として口語体の性格をもつことから、当時の口頭語に漢語が相当取り込まれていたことが窺われるのである。

4.2 漢語に対応する訓としての和語動詞

原文の漢字の訓が現在の通行とは異なる場合がある。論語里仁篇十一の「君子懐徳小人懐土」という一節を例に取ることにする。これは、現在では「君子徳を懐(おも)い、小人土を懐(おも)い」と読んで、「懐」に対して「おもふ(う)」と訓をつけている。

ところが、中田(1976)のp.200では「懐」にレハと送り仮名が附せられている。つまり、「おもふ(う)」とは読めない。実は中世では「やすんず(る)」と読まれていたのである。

この箇所は清原宣賢系の論語抄とされる⁽¹⁰⁾京都大学本『魯論抄』⁽¹¹⁾には、

(12) (論語)正義ノ心八君子ガ徳ヲヤスンズレバ小人ガ土ヲヤスンズル(『魯論抄』一巻59ウ)

とある。また、『文明本節用集』においても、論語のこの箇所が引かれていて、「懐」に「やすん

ず」という訓を附している。

したがって、中世では博士家において「懐」を「やすんず(る)」と読んでいたのであるが、『角川大宇源』によれば、近世の古訓には「やすんず(る)」は挙げられていない。

一方、『日本国語大辞典』においては、「やすんずる」の他動詞の意味を

(13) a. 安らかにする。やすめる。安んじる。

b. 甘く見る。軽く見る。あなどる。安んじる。

と記述している。これらの意味は『論語抄』の「懐」の意味とは合わないと思われる。したがって、「懐」の訓は「やすんず(る)」であっても、それは本来の和語の意味を離れ、対応する漢語の意味をもった訓としての和語になっていたのである。

つまり、中世の「やすんず(る)」は漢語と強く結び付いた言葉であって、語構成的には和語であるが、漢語に対応する訓としての和語動詞なのである。

そして、こうした和語の生じたことが契機となって、他の和語動詞全体に漢語サ変動詞の主格助詞表出の傾向が及んでいったと考えられる。

5 お わ り に

本稿では、中世において、漢語動詞が、初期抄物の言語を通して、主格助詞の表出を先導したことを明らかにした。特に、頻度の高い漢語一字サ変動詞における変化が動詞全体に徐々に進行していったと推測できる。これは、Tabor (1994) によれば、“frequency linkage effects” (頻度結合効果) と呼ばれるものである。「頻度結合効果」とは、簡単に言えば、頻度が高い言語現象は徐々にその頻度を増していき、ある時点で急速に普及することである。

Tabor (1994) は、新しい語が、それが生起するコンテキストと同じ他のコンテキストで使われようになると説明している。つまり、漢語動詞文で表出率が高かった主格助詞は、他の和語動詞文においても同様に表出率が上がる変化が起きたと推測できるのである。そして、Tabor は、従来の言語体系の変化をコネクショニストの立場から心理的プロセスとして説明している⁽¹²⁾。このような理論は、言語習得の問題を脳神経科学から解明する試みを言語の歴史的变化の問題に適用しようとする研究プログラムであって、言語変化の科学が可能であることを示そうとするものである。

註

(1) 野村 (1993) によれば、主文で主格助詞が表出されるようになったのは、『宇治拾遺物語』からである。しかし、そこで主格助詞の表出が急激に増加して現在のような状態になったわけではない。

(2) 小林 (2000) は、非対格動詞の述語の場合に無助詞から主格助詞表出へ変化したことを論じた。

非対格動詞とは、次例のように、主語が動作主・経験主とならない自動詞である。(『平家物語』は『日本古典文学大系平家物語上』、『天草版平家物語』は亀井・坂田 (1966) の翻刻による。)

(i) a. 上古にはか様にありしかども事₀い₀で₀こ₀ず、末代いかゞあらむずらむ。おぼつかなし」とぞ人

申ける。(『平家物語』)

b. 上古にはかやうのことがござつたれども、事がいできなんだが、末代にはなんとあろうぞと言
うて(『天草版平家物語』)

(i) a では、主語が無助詞であるが、対応する(i) b では、主格助詞「が」が表出されている。なお、非
対格性を上述したように、述語のとり項の意味役割として分析する枠組みは、Bresnan and Zaenen
(1990) を参照されたい。

- (3) 抄物とは中世につくられた日本語による漢文の注釈書である。詳しくは、大塚(1995)を参照されたい。
- (4) これは、称光天皇宸翰の部分である。
- (5) 無助詞の主語名詞句は、無助詞主格と無助詞主題に分かれるが、ここでは区別しない。この区別に関する問題は、小林(2004)で論じた。
- (6) 「の」は古代語では主格助詞として「が」よりも優勢であって、近世において、現代語のように属格専用の助詞となった。
- (7) 表3で、主格助詞表出率(が+/の/S)と主題助詞表出率(は/S)の合計は、和語動詞、漢語一字サ変動詞、漢語二字サ変動詞で70%台でほぼ同じである。Shibatani(1991)は、主題から主語への文法化を論じている。旧来の和語動詞が主題助詞の表出率が高く、漢語一字サ変動詞が主格助詞の表出率が高いことは、柴谷の主語の文法化の進行段階を反映しているのであれば、興味深い。
- (8) Miyagawa(1989)は、対格助詞「を」の表出への変化の原因を終止・連体の合流と考えている。ただし、著者は、Miyagawaのような格理論を前提にしていない。
- (9) 坂詰(1977)は、「注す(る)」が中世古辞書類にないことを指摘している。
- (10) 小林(1977)は、この系統の本について詳しく検討している。
- (11) 坂詰(1984)に影印、坂詰(1987)に索引が収録されている。
- (12) コネクショニズムとは、同時並列的な情報処理による情報原理を追求する立場である。言語習得は脳の神経回路網による学習のモデルとして研究される。学習のモデルとして、脳の神経回路網に入力層、中間層、出力層の三層が設定される。特に中間層の役割によって学習の進行が説明される。これはバックプロパゲーション(逆伝播学習法)と呼ばれる。概説書として甘利(1989)があげられる。

参考文献

- Bresnan, J. & Zaenen, A. (1990). Deep Unaccusativity in LFG. In *Grammatical Relations: A Cross-Theoretical Perspective*, pp. 45-57. CSLI.
- Krock, A. S. Syntactic Change. In Baltin, M. & Collins, C. (Eds.), *Handbook of contemporary syntactic theory*, pp. 699-729. Blackwell, Oxford.
- Miyagawa, S. (1989). *Structure and Case Marking in Japanese*, Vol. 22 of *Syntax and Semantics*, chap. 6, pp. 199-246. Academic Press.
- Shibatani, M. (1991). Grammaticalization of topic into subject. In Traugott, E. & Heine, B. (Eds.), *Approaches to Grammaticalization*, Vol. 2, pp.93-134. John Benjamins.
- Tabor, W. (1994). *Syntactic Innovation: A Connectionist Model*. Ph.D. thesis, Stanford University.
- 甘利俊一(1989)『神経回路網モデルとコネクショニズム』、『認知科学選書』, 22巻, 東京大学出版会。
- 大塚光信(1995)「抄物概説」, 『中華若木詩抄湯山聯句抄』, 新日本古典文学大系, pp.557-578, 岩波書店。
- 亀井高孝・坂田雪子(1966)『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』, 吉川弘文館。
- 小林賢次(1977)「清原宣賢系論語抄について 書陵部蔵「魯論抄」の本文の性格をめぐる」, 『近代語研究第五集』, 武蔵野書院。
- 小林茂之(2000)「中世における主格助詞表出の一変化について」, 『国語と国文学』, 77(12)。
- 小林茂之(2004)「外国資料からみた中世・近世初期日本語における主題主語の有助詞化」, 『聖学院大学論叢』, 17(1)。
- 坂詰力治(1977)「抄物の動詞について 漢語サ変動詞を中心にして」, 『近代語研究第六集』, 坂詰(1987)

所収。

坂詰力治（1984）『論語抄の国語学的研究影印篇』，武蔵野書院。

坂詰力治（1987）『論語抄の国語学的研究研究・索引篇』，武蔵野書院。

野村剛史（1993）「古代から中世の「の」と「が」」，『日本語学』，12（10）。

中田祝夫（編）（1976）『応永二十七年本論語抄』，勉誠社。